氏名（本籍）	萬代恭博（東京都）
学位の種類	博士（工学）
学位記番号	乙第1187号
学位授与の日付	2024年3月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	**坂倉準三による「プロトタイプ無限成長美術館」の実現作を通してみる日本の建築美学を反映した国際建築様式の受容**
論文審査委員	（主査）教授　山名　善之 教授　岩岡　竜夫　　教授　垣野　義典 教授　寺部慎太郎　　教授　郷田　桃代

論文内容の要旨

本論文は、第二次世界大戦前後の1930年代にル・コルビュジエのもとで建築実務修行を積んだ坂倉準三が設計した二つの作品、1937年のパリ万国博日本館と1951年の神奈川県立近代美術館に焦点を当てる。国際様式は1950年代以降、その土地の風土や文化を反映した側面が近現代建築に見られるようになり「地域主義（Regionalisme）」を分析するために建築史家ケネス・フランプトンにより「Tectonic Culture」の視点が提示された。本論文では、このような観点から、対象の二つの建築作品をル・コルビュジエの「プロトタイプ無限成長美術館」と比較し、国際様式を反映したプロトタイプとの相対化を行う。このようにして、二つの対象作品を、日本が国際様式を受容していく重要な過程を示すものとして位置付け、そこにどのような日本の建築美学が反映されていたのかを明らかにする。

本論文の目的は、日本が国際的な建築言語を受容する過程で現れた戦後日本のモダニズム建築の出現の特徴を提示することである。論文は序論、5つの章と結論から構成されている。結論では、第1章、第2章を前提に第3章～第5章の知見を考察し、パリ万国博日本館、鎌倉近代美術館、「プロトタイプ無限成長美術館」の属性比較から、日本の建築美学が国際様式の建築言語に反映され、それによって自然との空間的な調和が日本のモダニズム建築の萌芽の空間的特徴の一つであったことを明らかにしている。これは日本が国際様式を受容していく重要な特徴であり、坂倉の2つの作品はその過程を示すものとして位

置づけることができる。このことは、近現代建築史における既存の作家論や様式論では評価が困難であった空間的特質の具体的な証拠となるものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、近現代建築史において日本が国際様式を受容する背景のなかで、第２次世界大戦前後に建築家・坂倉準三により設計された1937年パリ万国博日本館および1951年鎌倉近代美術館の二作品が、建築家ル・コルビュジエによる『プロトタイプ無限成長美術館』といかに共通性および差異を持ち合わせているかを比較分析し明らかにすることを目的としている。

本論文は５つの章と結論から構成される。

第１章では、日本における国際様式の受容と伝統表現に着目し、当時の日本国内での議論の変遷と国際様式の評価の変遷を対照させることにより、国際様式の伝播を「地域性」の視点で捉えていく際の着眼点を整理している。

第２章では、プロトタイプと坂倉の実践に着目し、工業化を背景に既存の様式主義の批判から生まれた国際様式の伝播の方法として、ル・コルビュジエが探求した『プロトタイプ無限成長美術館』の思想と変遷を把握し、弟子として探求に協働した坂倉準三がいかに「プロトタイプ」の解釈と実践を行ったのかについて捉えていく際の着眼点を整理している。

第３章では、パリ万博日本館における構造と意匠について、当時の海外批評家の言説から「テクトニックカルチャー」に関する視点を導出したうえで、意匠設計図および設計図から再現した３DCGにより具体的な空間属性を把握し、この計画にいかに『プロトタイプ無限成長美術館』の具体的な属性が反映されたのかを明らかにしている。

第４章では、鎌倉近代美術館における構造と意匠について、当時の設計スタッフの言説から「テクトニックカルチャー」に関する視点を導出したうえで、意匠設計図および構造設計図により具体的な空間属性を把握し、この計画にいかに『プロトタイプ無限成長美術館』の具体的な属性が反映されたのかを明らかにしている。

第５章では、第３章および第４章で得られたパリ万博日本館、鎌倉近代美術館に関する知見と『プロトタイプ無限成長美術館』の比較分析を行い、坂倉による二作品がプロトタイプと「構造架構」について相違点を持つことを確認し、敷地を限定しないプロトタイプに対して坂倉の二作品には敷地との関係性に「空間表現」の主題が存在すること。そして「構造架構」が「空間表現」の構成要素として重要視されていることを明らかにしている。

以上に基づき、結論では第５章の知見に第１章および第２章での議論を加えて考察し、パリ万博日本館、鎌倉近代美術館と『プロトタイプ無限成長美術館』の属性的な比

較によって、日本の建築構造の美学が世界共通の建築言語によって相対化して示されていることを指摘している。

本審査の経過と論文の修正について概要を記す。

第一回審査会では本論文でのプロトタイプの意味を明確にすること。併せてル・コルビュジエの設計意図における『プロトタイプ無限成長美術館』、また、研究対象の二作品の時系列的な対応関係を示すこと。国際様式とは何かを明確にすること。それらを反映した章構成とすること。論文題目にある「日本化」について再考する必要があるとの指摘があった。

第二回審査会では第一回の修正事項についての確認を行った。また、再度、論文題目に関する修正意見が出され上記の論文題目とすることが了承された。再現性をより担保すること、注記、参考文献をより正確にすることなどの意見が出され、第三回発表会までに修正、加筆することとした。

第三回審査会（公聴会）には対面参加として審査員以外に本学元教授、客員教授、他大学名誉教授等を含む 17 名、オンライン参加として 4 名の参加があり、第二回審査会までの修正、加筆の確認を行うとともに、論文の意義が確認された。

以上より、本論文は日本における国際様式の受容を「テクトニックカルチャー」の視点から捉えるといった既往研究にはない独創的な視点から捉え、第 2 次世界大戦前後の国際様式によるプロトタイプと実現作の差異及び同質性について明らかにしており、近現代建築史の新たな視座を築く論文として位置づけることができる。よって本論文は博士（工学）の学位論文として十分に価値あるものと認める。